

元留学生のライフストーリーにみる留学評価 —研究者夫婦の場合—

池田 庸子*

Life Story Interview of Former International Students: A Case Study Analysis of a Researcher Couple

Yoko IKEDA*

要旨

日本の大学院の英語プログラムで博士号（理系）を取得し日本で生活する研究者夫婦を対象に、ライフストーリー・インタビューを行った。2名の語りから、人生における留学の意義、留學生活における日本語の学習と使用、留學後の日本との関りに焦点をあてて、分析を行った結果、以下のことが明らかになった。1) 2人に共通している点として、博士号取得と研究業績が留學評価の最も重要な指標となっている、2) 大学の規模や留學生数、カリキュラムの違いにより日本語の使用頻度も異なり、日本語に対する自己評価にも違いが生じている、3) 必要に応じて日本語や英語を使い分け、時には翻訳アプリを使用した柔軟なコミュニケーションを図りながら日本人との交流を行っている、4) 日本語授業を含めた様々な交流プログラムが直接・間接的に留學生の支援や日本人との交流に繋がっている、5) 日本に長期滞在するなかで、出産や子育てなど日本語が求められるコミュニティへの参加頻度が増えている。留學終了後も日本で就職し生活する元留學生が増えるなか、長期的な視野にたった日本語教育や留學生支援が必要である。

【キーワード】 ライフストーリー、元留學生、留學評価、日本語学習、研究者夫婦

1. はじめに

国の政策として外国人留學生の受け入れ拡大を目指すなかで、大学においても様々な留學プログラムが用意され、留學生の多様化が進んでいる。また、以前は留學期間が終了すれば母国に帰るケースが多かったが、近年では日本で就職し、長期間日本で就労し生活するケースも増加している。

*茨城大学全学教育機構 (〒 310-8512 水戸市文京 2-1-1; Institute for Liberal Arts Education, Ibaraki University, 2-1-1 Bunkyo, Mito-shi 310-8512 Japan)

少子化に伴い労働力人口が減少する日本において外国人は貴重な人材であり、その中でも日本の教育制度の中で学んだ経験を持つ「元留学生」に対する期待は大きく、今後ますます元留学生の活躍や参加の場は広がっていくことが予想される。

このように多様化そして長期化する留学及び留学後の生活を個別的に分析する方法として、近年日本語教育においてもライフストーリー・インタビュー研究の手法が用いられている。桜井 (2012) は、ライフストーリー研究とは、「個人のライフに焦点をあわせてその人自身の経験をもとにした語りから、自己の生活世界そして社会や文化の諸相や変動を全体的に読み解こうとする質的調査法の一つ」であると述べている。また三代 (2015) は日本語教育学としてのライフストーリー研究の意義を「人は、社会・文化の中でどのように日本語を学んでいるのか。日本語を学ぶことは、人にとってどのような意味があるのか」を探求することであると述べている。学習者がどのように日本語を学び、日本社会との関りを持ってきたかを個々の語りをもとに通時的に分析する。川上 (2014) は日本語教育におけるライフストーリー研究の意義として、限られたデータと調査者自身が設定したテーマによって、調査者がどのような「社会的現実」を抽出し、何を語り、日本語教育学の発展にどのように貢献するのかということであると指摘しているが、それぞれの語りから何を感じとるか、さらには日本語教育へどのように還元していけるのかという視点も重要である。

現在、多様な学習者を対象にライフストーリー研究が行われている。三好 (2009) は韓国人留学生のライフストーリーから、人間関係の構築やコミュニティの形成過程と日本語の学びを一体となったものととらえていると分析している、中山 (2007, 2011) は学部留学生を対象に、自分らしさや職業選択といったアイデンティティに関わる問題と日本語習得やネットワークとの関係性を分析している。日本語教育におけるライフストーリー研究の多くは日本語上級者を対象としており、日本留学期間中に高い日本語能力を身に着けた学習者を対象としている。しかし、近年英語で学ぶプログラムも増えており、日本に留学していても必ずしも日本語能力向上が伴うわけではない。

本研究では、日本の大学院の英語プログラムで学び、博士号を取得後、現在は研究者として日本で生活するアジア出身の元留学生夫婦にライフストーリー・インタビューを行い、人生における留学の意義、留学生活における日本語学習と使用、留学終了後の日本との関係の3点に焦点をあてて、分析と考察を行う。

2. 研究方法

2017年の3月と9月に、研究者夫妻にライフストーリー・インタビューを行った。3月に夫である協力者Aにインタビューを行い、9月に妻である協力者Bにインタビューを行い、協力者Bのインタビュー終了後、協力者AとBの両者同時にインタビューを行った。インタビューを依頼する前に、「留学する前から現在に至るまでの生活やその時に考えていたことについて話していただきたい」という大まかなインタビューの内容を伝えておき、協力者の了解を得て、ICレコーダーにインタビュー内容を録音し、それを文字化した。インタビューの内容は多岐に渡ったが、1) 人生における留学の意義、2) 留学生活での日本語の学習と使用、3) 留学終了後の日本との関係の3点に関わる内容を中心に抽出し、時系列にまとめた。インタビューは英語と日本語の両方で行われたが、紙面の関係上、英語による会話は筆者が日本語に翻訳して掲載した。協力者の言葉を極力そのまま伝えるため、会話形式と引用を交えた要約の形式とを併用した。協力者が日本語で回答している場合は、普通の字体で、筆者が翻訳した内容はイタリック体で示した。また、個人や場所が特

定されるような固有名詞は一般名詞や記号に変更した。

3. 語りと考察

3.1. インタビュー協力者 A さんの結果

3.1.1. インタビュー協力者 A さんの略歴

協力者の A さん（男性）はアジア出身の理系の研究者で、国費留学生として約 10 年まえに来日した。来日直後の 4 か月間は地方国立大学で日本語を集中的に学び、その後同大学の博士課程で博士号を取得する。博士号取得後は母国の大学に勤務し、その後別のアジアの国で 1 年半在外研究を行った。インタビューの約 1 年半前に来日し、再び日本で研究者として生活している。

3.1.2. インタビュー協力者 A さんの語り

《留学以前》

A さんは留学以前に母国の大学で修士号を取得し、母国の大学で研究者として教壇に立っていた。博士号を取得したいと思い、日本の様々な大学にメールをだして、受け入れ大学を探していた。その際、A さんの専門の分野で著名なある教員から返事をもらい、日本の地方国立大学（以下 X 大学）に留学することを決めた。

*：日本に来ようと思ったのはどうしてですか。

A：日本のいろいろな大学にインタレストレターを出して、その時、X 大学の先生から。その先生は（研究分野）の有名な先生です。先生にリサーチプランをだした。先生は OK。

*：それは世界中の先生に出したんですか。日本の先生に出したんですか。

A：日本の大学に。私の大学に多くの先生は、後期課程を日本でしています。日本には進んだ設備や実験施設もあり、いい研究がされています。最優先は日本です。

*：その時、日本語は勉強しましたか。

A：いいえ、全然。X 大学に来て、初めて日本語を勉強しました。

*：日本に来る前に、日本語はいると思っていましたか。

A：英語で大丈夫だと思っていました。日本語は全然勉強しませんでした。

英語プログラムで学ぶため、特に日本語は必要ないと考えていた。また、留学前の日本のイメージについて聞いたところ、子供の時に見たドラマ「おしん」のイメージがあったという。まだみんな着物を着ていると思っていたという。

《留学中の日本語習得》

来日直後の 4 か月間、日本語を入門レベルから集中的に学んだ。その期間は月曜日から金曜日までは日本語を学び、週末は研究室のある別キャンパスに通って研究を行う生活を送った。日本語を学んでいるときの様子を以下のように振り返っている。

*：日本にきて、「あいうえお」から勉強しましたね。どうでしたか。

A：楽しかったです。・・・クラスで勉強して、後で部屋で勉強しました。私のチューターと時々話しました。

*：そこでの生活はどうでしたか。

A：とてもよかった。その時、リサーチのプレッシャーがない。毎日、日本語クラスの友達といっしょにいろいろなところに行きました。プレッシャーがないので楽しかった。でも土

曜日と日曜日は研究室に行きました。

日本人学生との交流に関して、聞いたところ、「あまり」という回答だった。日本人チューターとの交流はあったが、ほかの学生とはほとんど交流がなかったようである。地域の人との交流に関しては、大学の行事として行っている週末ホームステイで知り合った家族との交流があり、衣類などを譲り受けたり、博物館に連れて行ってもらったりして、現在も交流があるという。

日本に来たばかりの時に、何か困ったことがあったか聞いたところ、自転車のパーキングのことで些細な問題があったぐらいで、後は no problem とのことだった。チューターや指導教員、同国人の留学生の助けをかりるなど、うまくサポートを得ていたようである。

《博士後期課程の生活》

4か月集中的に日本語を学んだあとは、日本語の授業は履修しておらず、クラスで日本語を学ぶことはなかった。日本語の使用に関して以下のように語っている。

*：いつ誰と日本語で話しましたか。

A：Lab members。日本語でときどき、たいてい英語。

*：先生とは？

A：英語。研究には日本語はいらない。クラスも全部英語の授業。これは英語のプログラムなので。

*：もっと日本語を勉強しようと思いましたか。それとも、もう日本語はいい？

A：Lab のプレッシャー。リサーチがターゲットだから。

*：何かしましたか。日本語を維持するために。

A：私は勉強したので、ひらがなカタカナは大丈夫でわかります。漢字は難しい。テレビを見ました。日本語のテレビを見ました。

*：Lab のクラスの人はどうでしたか。

A：大丈夫でした。私の研究の始めの時、日本人が協力的に教えてくれた。英語でコミュニケーション大丈夫です。今もコミュニケーション、ときどき（当時の学生が）大学に来ます。

*：日本語ができなくて、大変だったことはあまりないですか。

A：日本語ができるといいです。できないと少し、でも今は大丈夫です。少しだけ話します。

《留学後の日本との関わり》

Aさんは日本の大学で無事博士号を取得し、母国の大学に戻り教える。日本との関わりについて聞いたところ以下のような回答であった。

A：私の先生（日本の大学の指導教員）とメールでコンタクトしました。リサーチペーパーとか。日本の別の大学の post doctoral が私の国に来ました。一緒にリサーチしました。

帰国後も日本の指導教員と研究上のつながりがあり、連絡を取っていた。また、日本の他大学の研究者が来た際も合同研究をしている。これらの合同研究に関わる言語はすべて英語で、コミュニケーションについて聞いたところ、「英語で大丈夫。英語は上手です。」ということであった。また、妻である Bさんが日本に留学しているため、長期の休暇に日本を訪れている。アジアの別の国で約1年半博士研究員として研究した。

《現在の日本での生活》

インタビューを行った時点から約1年半前に日本の母校である X大学に戻り、研究者として在籍している。Bさんも日本の大学で博士号を取得し、夫婦共に X大学で研究者として生活している。子供が生まれ、3人で大学近くのアパートで生活している。

A：以前に比べて、家族と一緒に住んでいるのでそれはいいです。同じアパートに住む人ともいい交流があります。子供を見に来てくれたりする。アパートのそばに誰も利用していない土地があって、野菜を作っている。トマト、じゃがいも、それを近所の人にあげている。近所の人もよく何かくれる。

*：それはいいですね。その時は日本語を話しますか。

A：はいはい。

*：お子さんは保育園ですか。

A：プライベート保育園。毎日保育園に行きます。朝と夜、9時から5時半ぐあい。その時、保育園の先生と日本語で話します。・・・今日は大丈夫ですか。何を食べましたか。飲みましたか。何時まで寝ました。

保育園の先生とは送迎時に話すだけでなく、毎日の様子に関する連絡なども日本語でノートに書いて行っているという。

《日本での留学を振り返って》

日本での勉強、研究、日本語の習得などに関して振り返ってもらった。

A：博士課程の時は、目標があった。論文や研究を完成させなければならない。そのプレッシャーがありました。でも、研究はシステムチックで、問題なくそれができた。帰国後やポストクでの研究も日本での経験を活かすことができたのでよかった。

*：研究面では日本語はいらなくても、それはどうでしたか。

A：日本語はできたほうがいい。新しい技術や分析方法を学びたい。日本人学生は日本語ではうまく説明できるけど、英語では情報が抜けることがある。

*：Aさんは半年日本語を集中的に勉強したけれど、それはどうでしたか。

A：とても役に立ちました。時々日本人の学生と日本語で話せたり、日常生活では、買い物に行ったり、どこかに行ったり、場所を見つけたりしたいとき、とても重要です。

*：じゃあ半年の日本語集中は役に立ったんですね。

A：はい、もちろんそうです。もしどこかに行きたかったら、「すみません。私は東京に行きます。どうやって行きますか。上野から京浜東北線・・・大丈夫です。」

Aさんの場合は、3年間のうちの最初の1学期分を日本語の勉強に充てている。その期間も土日は研究室に通い研究をしていたが、実質2年半で博士号取得のための研究や論文を仕上げるというスケジュールだった。日本の来日前から指導教員の先生と日本語学習を含めた研究計画を立て、無事3年で終了している。日本語学習について聞いた。

A：日本語を勉強するいい点は日本語がどんな言語か理解できて、日常生活が送りがやすくなります。私が受けた日本語授業はすごく役に立ちました。日本人と会話することができます。必要なことや手伝ってほしいことが言えます。でも日本語を勉強していない人にとっては難しいです。悪い点は、日本語を勉強していると、研究に集中できないことです。

3.1.3. Aさんの語りに関する考察

Aさんのインタビューでは、研究者として日本で学位を取り研究を成功させるという強い信念とそれゆえに感じていたプレッシャーが幾度となく語られていた。母国の大学の先輩教員たちの多くが日本で博士号をとり、研究者としての実績を積んでいくなかで、Aさんも同様に日本を留学先として選び、研究者としての基礎を築く場所として選択している。日本に対して「最先端」「充実し

た設備」というような学術的な分野に関する印象を語る一方で、人々が着物を着て生活している「おしん」のイメージもあり興味深い。

Aさんにとっての留学評価はほぼ研究業績を基準とした評価であると言っていいだろう。予定通り博士号が取得でき、論文や研究の実績を残せたことを自身の留学評価として振り返っている。研究中心の生活のなかで、最初の1学期を別のキャンパスで日本語の勉強に費やすのは不安もあったであろう。しかし指導教員の勧めと協力により1学期間日本語を集中的に学ぶ。そのことに関して、Aさんは日本語ができたほうがベターだと述べ、Aさん自身は3年間で日本語と博士号取得の両方ができたことに関してラッキーだったと振り返っている。英語プログラムで学ぶ大学院生にとっては、指導教員の考えやカリキュラムにより、希望しても日本語学習ができないケースもあるため、うまく両立できたケースと言ってよいだろう。

研究者として留学を評価すると同時に、日本における生活者としての満足度が高いことがうかがえる。日本語が役に立ったかという質問に対し、Aさんは道の聞き方やどうやって目的地まで行くかを日本語で流暢に語ってくれ、それは自信に満ちた語り口であった。また、現在は家族3人で暮らしているが、近所づきあいや保育園の先生とのやり取りなど、地域コミュニティに溶け込んでいく様子が窺える。「近所の人や保育園の先生と日本語で話すのは楽しいですか」という質問に、「楽しいです」と嬉しそうに答える様子が印象的であった。

3.2. インタビュー協力者Bさんの結果

3.2.1. インタビュー協力者Bさんの略歴

BさんもAさんと同じ国の東南アジア出身で、同国の大学で修士号を取得したあと、Aさんに1年遅れて日本に留学する。Bさんが留学した大学（以下Y大学）は大規模な国立大学でグローバル化も進んでいる。Bさんは5年間一貫の博士課程で学び、理系分野で博士号を取得する。博士号取得後Y大学に研究者としてしばらく残りその後、母国に戻る。約半年後Aさんと共に来日し、X大学で研究者として研究を行っている。

3.2.2. インタビュー協力者Bさんの語り

《留学以前》

修士号を取得した後、海外の大学で勉強を続けたいと考え、自分の研究に合った大学を探していた。その際、Bさんの先輩や先生の多くが日本で博士号を取得していたことから、Bさんも日本への留学を考えるようになる。国の日本大使館の教育アドバイザーと話して、日本についての話を聞き、気持ちを強くする。

*：語学の心配のないアメリカの大学とかは考えなかったんですか。

B：Y大学での授業は全て英語なので、自分に合っていると思いました。それに日本語にも興味がありました。

*：日本に行く前に心配や不安はなかったですか。

B：私の先輩や先生から、特に女性にとって日本は最も安全な国なので、心配しなくてもいいと聞きました。日本大使館の教育アドバイザーからも日本の文化やいろいろなことなど、何も心配いらないと聞きました。もしあなたがコミュニケーションを取りたいなら、日本人はいつでも手伝ってくれると。

*：日本に関するイメージがありましたか。

B：着物を着ているイメージでした。着物は伝統的なものではなくて、普段着だと思っていました。私の国で毎日着る伝統服のように。私も着物を着ないといけなかったと思っていました。でも Y 大学のウェブサイトを見て、普通の服を着ていることを知りました。

B さんが日本を留学先として選んだのは夫である A さんがすでに来日しているということもあろうが、研究者として、特に女性研究者として最適な留学先であると判断し、自分の研究分野を学ぶのに適したプログラムがあることから Y 大学を選択した。B さんの留学に際し、A さんからは「結婚しているからといって、自分がしたいことができないということはない、自分の道を進めばいい、助けが必要な時は助けてあげられる」との助言があったという。

《留学中の日本語学習とコミュニケーション》

B さんは Y 大学の 5 年間一貫のプログラムで学生生活を始める。そのプログラムは英語によるプログラムで最初の 1 年間は週 1 コマの日本語の授業が必修科目となっていた。日本語クラスは同じプログラムで学ぶ留学生十数名が履修しており、最初の学期では日常生活に必要な日本語、ひらがな、カタカナを、2 学期目には文法を学んだという。

*：日本語のクラスはどうでしたか。

B：役に立ちました。日本に来た時、日本語を一言も知らなかったのです。

*：大変でしたか。日本に来た時。

B：1 か月と 2 か月は大変でした。スーパーマーケットに行ったとき、何もしゃべらない。でも Pick and pay は大丈夫。でも手紙をもらった時、わからなかった。

*：誰が助けてくれましたか。手伝ってくれましたか。

B：日本語の先生。チューター。研究室の中の人が入ってくれました。

B さんが 1 年次に履修した日本語のクラスは役に立ったという。もし機会があったらもっと日本語を勉強したかったか聞いたところ、勉強はしたかったが、研究室がとても厳しく忙しかったため、時間を割くことができなかったと述べている。また、指導教員から、他の研究室の学生が英語を話せるようになるように、英語を教えてほしいと頼まれ、英語でコミュニケーションをとっていた。B さんがいた研究室は 35 名中、10 名が留学生で残りが日本人学生だったという。

*：25 人日本人学生がいたんですね。

B：そうです。でも彼らは留学生とのコミュニケーションにとってもシャイでした。でもときどき、研究室の実験のために話さないといけない。

*：コミュニケーションをとるとき、英語で話しましたか。

B：日本語で話し始めたけど、日本人学生は英語を話したかった。それと、スマホがあったから、日本人が日本語で言って、グーグル翻訳で翻訳して、「このことが言いたい」と言って、見せてくれた。

*：ある意味日本語は必要なかったんですね。

B：そうじゃないです。もちろん必要です。機械のマニュアルはほとんど日本語でわからないから手伝ってもらう。最初日本語で説明するけど、わからないときは、英語でもう一度説明してくれます。

週に 1 コマの授業でできることは限られるが、日本語のクラスは役に立ったようである。しかし、授業が英語であったこと、周りの日本人学生の英語力は比較的高く、英語を練習したいと考える学生や、英語を練習させたいと思う教員の意向があったことなど日本語を話す機会は多くなかったようである。またグーグル翻訳を使って意思の疎通を図るなどテクノロジーを上手く利用している。

それでもやはり日本語は必要と感じたようである。

《日本人や地域との交流》

交友関係に関して聞いたところ、特に問題はなかったという。大きな大学で留学生の数も多く、日本人学生も英語と日本語の両方でコミュニケーションをとることができたため、特に問題は感じなかった。Y大学の学生との交流に関しては、大学のイベントを通じて日本人学生と知り合ったようである。

*：どうやって日本人学生と友達になりましたか。

B：インターナショナル・スチューデントクラブや英語カフェで。英語カフェは月に2回ありました。大学のメールでそのプログラムを知りました。基本的には日本人学生がプログラムを企画して、留学生が参加します。もちろん無料で、お茶をしながら話しました。

そこで知り合った日本人学生と英語や日本語で会話したり、一緒に出掛けたりしたという。また、大学が地域の人をホストファミリーとして紹介する制度も利用して、日本人女性との交流があった。

B：ホストファミリーがいました。彼女は忙しかったけど、よく手伝ってくれました。私が別のアパートに引っ越さなければいけなかったとき、手伝ってくれました。

*：ホストファミリーと何をしましたか。

B：まず、私と話に来てくれました。時々、私の家で料理を作ってあげたり、公園に座って話したり、日本料理を作ってきてくれたりしました。・・・すごくいいプログラムでした。茶道やひな祭りなどたくさんの日本文化を彼らを通じて学びました。

1年生の時に紹介されて、5年間交流が続き、今も連絡を取っているという。Aさんからホストファミリーとの関係について話を聞いていたため、大学からホストファミリー紹介の知らせがあったとき、迷うことなく申し込んだという。また、歯の診察の際に歯科医師の先生とも親しくなり、週に1回歯科医やそのスタッフに英語を教えるなど、多忙な中でも地域の人との交流も行っている。

《留学を振り返って》

BさんはY大学で大学院学生として約5年間、X大学で研究者として約2年間生活し、二つの大学の違いについても語っている。

B：Y大学ではもっと英語を使いました。でもX大学では日本人学生は日本語で話したがりです。だから日本人学生は私ができるようにやさしい日本語を話してくれます。X大学では日本人の学生が多いです。

*：X大学とY大学では学生は違いますか。

B：X大学の学生たちはもっとやさしい。

また、X大学では英語ができる事務職員が限られているため、他の事務の人ともやさしい日本語で話す必要がある。さらに、現在では子育てでも日本語が必要なため、日本語を話すことも多い。保育園の先生とのコミュニケーションは日本語で行い、ラインを使って連絡を取ることもあるという。また出産の際にお世話になった病院スタッフとも交流があり、研究以外の人間関係で日本語を話す機会が増えている。

現在はAさんと子供と共に日本に暮らし、X大学の研究者として研究に従事しているが、それまではお互いに研究者として別々の大学で学び研究を続けてきた。結婚と研究生活との両立について聞いたところ、結婚して長い間夫婦別々に暮らすのはBさんの国では珍しいケースで、親や友

人からの心配の声もあったと言う。研究を優先させる時期と家族での生活を優先させる時期とを考え、現在があると振り返っている。現在、BさんはAさんと日本に残る可能性も含めて検討しているが、日本での生活や仕事に関して以下のように述べている。

B：日本のシステムや環境が好きです。とても快適です。日本語はあまり上手じゃないけれど、もし仕事や機会があれば日本にもっといたいです。

最後に日本で研究がしたいという人がいたら、Bさんならどんなアドバイスをするか聞いたところ、「私がしてもらったアドバイスと同じアドバイスをします。何も心配しないで日本に行くといい。特に女性にとってとてもいい環境です」と語っていた。

3.2.3. Bさんの語りに関する考察

夫のAさんが1年先に日本の大学で後期課程を始めていること、大学の先生や先輩が日本の大学で博士号を取得し研究を行っていることなど、Bさんが留学先として日本を選択したのは自然な流れであったと言えよう。Bさんは自分にとって最適なプログラムがあるY大学に留学するが、Y大学はAさんが学ぶX大学とは新幹線でも数時間の距離にあり、基本的には一人で大学院生としての生活を始めることとなる。

日本語学習に関しては最初の一年間、週1回授業を取っただけであったが、文字を学び、言語の基礎を学んだことが役に立ったと語っている。Y大学では英語プログラムの学生に日本語の授業を必修として課しているという。Bさん自身、日本語の必要性を感じながらも2年次以降は研究が忙しく日本語を勉強する時間が取れなかった。また、グローバルな大学で留学生も多く、日本人学生も比較的英語ができること、研究室で英語を話すことを期待されていることなど、日本語を使う機会は多くなかったようである。日本語を話すことにこだわらず、英語でも日本語でも必要に応じて使い分けるなど、柔軟に対応することで、日本人学生や地域のコミュニティとも良好な関係を築いている。また、英語カフェに積極的に参加したり、地域の人に英語を教えたりすること、さらにはホストファミリーをBさんの家に招待して手料理を振る舞うなど、サポートされる側だけではなく、サポートする側にもなり、相互的で良好な関係を築いていることが窺える。

また、留学中のAさんの存在も大きく、インタビューの折々でAさんのアドバイスがあったことに言及している。ホストファミリープログラムに参加したのもAさんの先輩留学生としてのアドバイスがあったため迷わず応募し、限られた時間のなかでどうやって日本語を学ぶかなどアドバイスを受けたという。

X大学に来てからは研究だけでなく、出産や育児を通して日本語が必要な場面が増えている。出産時の病院のスタッフ、保育園の先生、近所の人など日本語で会話をしながら良好な関係を築いている様子が窺える。

4. 考察と今後の課題

2人は同じ出身国で同じ理系分野の研究者であり、博士号を取得するために日本の大学で学んだ。2人に共通する点としては、自身の留学評価において博士号取得とその後の研究成果が大きな指標となっていることである。2人とも留学期間中は博士号の取得と研究の成功が最大の目標であり、その目標を達成するためにプレッシャーを感じていたと振り返っている。予定通り博士号を取得でき、大学院在学中に行った研究がその後の研究にも繋がっている点を高く評価している。

大学のカリキュラムの違いにより、Aさんは1学期の日本語集中授業を受け、Bさんは週1コマの日本語授業を1年間受講した。どちらの大学も英語プログラムであり、授業や研究は基本的には日本語を必要としない。しかしAさんが学んだX大学は留学生数も少なく、日本人学生も日本語で話そうとするなど、より日本語が必要な状況であったことが窺える。インタビューも大半は日本語での受け答えであった。一方でBさんは日本語の授業数も限られており、留学生も多く、日本人学生も英語と日本語の切り替えが容易にできる環境で過ごした。X大学に移ってから日本語を話すことが増えたと述べていたが、「日本語はあまり上手じゃない」という自己評価であった。また、日本人学生と正確な情報共有が必要な際に、コミュニケーションツールとしてスマホで翻訳アプリを利用して相互の意思疎通を図っている。テクノロジーの発展とともに、日本語でのコミュニケーションの方法も変化しつつあることが明らかになった。しかし、アプリの助けがあっても日本語は様々な場面で必要であり、留学初期に日本語を学べたことは役に立ったと2人とも述べている。

Y大学の場合は、1年間の日本語授業を必修としているが、近年英語によるプログラムが増え、日本語を全く学ばずに日本での留学生活を送るケースも増えている。特に理系の分野で博士号取得を目的として留学する場合は、AさんやBさんの語りにもあるように、研究が最重要であり、Aさんが「日本語を勉強していると、研究に集中できないこと」と述べているように、研究と日本語学習の両立は時間的にも困難である。だからこそ、カリキュラムとして比較的負担の軽い初年次に日本語授業を組み込むことは留学生生活全般のために重要ではないかと考える。Bさんに「誰が助けてくれたか」聞いたところ、「日本語の先生」が最初に挙げた回答であった。何か問題が生じたときや留学直後の困ったときに、指導教員以外にも留学生がより多くの大学との繋がりを持っていることが重要であろう。

日本人との交流に関して、日本語が話せることが日本人との交流に重要な役割を果たしたという報告も多いが（池田・八若 2016, 2017、佐藤 2013、中山 2011、三代 2009）、Bさんの場合、言語に関係なく日本語や英語をその場に依拠して使い分けながら良好な交友関係を築いている。Bさんが学んだ大学が大規模大学で、大都市にあり、英語ができる日本人が比較的多い環境であったことも影響していると推測されるが、さらに重要な点は、Bさんのコミュニケーションを取りたいという姿勢であろう。Bさんが留学前に「もしあなたがコミュニケーションを取りたいなら、日本人はいつでも手伝ってくれる」と言われたことを語っているが、積極的に日本人との交流の機会に参加し、時間的な制約のある中でも、交流を継続する努力をしている。中山（2007）は留学生と日本人の友人との社会的ネットワークは「互惠的」という特徴があると述べているが、Bさんも英語を教えたり、国の料理を作ったりするなど、Bさんが提供できることを積極的に提供しながら良好な関係を維持してきたと言えよう。

また、日本人学生や地域との交流に大学が提供したプログラムが重要な役割を果たしていることが明らかとなった。AさんもBさんも大学主催のホストファミリープログラムに参加し、その後も家族と一緒に出かけたり、料理を作ったりと、大切な地域との繋がりになっており、ホストファミリーを通じて日本文化を学んだと振り返っている。そして10年近くたった現在でも連絡を取っている。三代（2009）はコミュニティへの参加が留学生にとって非常に重要な役割を果たしていることに注目し、「国や言語の境界を越えたコミュニティをいかに築いていくか」という視点からカリキュラムは見直されるべきだと主張している。今回の調査でもコミュニティ形成支援の重要性が再確認される結果となった。

現在、AさんとBさんは協力しながら、子育てと研究の両立を図っている。家族で日本に住み、

出産や子育てをしながら研究生生活を継続するためには、さまざまな人のサポートが不可欠である。特に地方都市では、英語ができる病院や保育園を選ぶことは難しく、日本語でのコミュニケーションが不可欠となる。AさんBさん夫婦も、病院スタッフ、保育園の先生、近所の人など、日本語でコミュニケーションを取る機会が以前よりも増えているという。研究者にとって必要な言語は英語であるが、日本での研究生生活を継続するためには、生活者として日本語でコミュニケーションを取ることもますます必要になる。留学期間終了後も日本で生活する留学生が増えるなか、日本社会との長期的な関係性構築も視野に入れながら、当事者の多様な声に耳を傾け、どのような日本語教育や留学生支援が求められるのか考えていく必要がある。

付記

本研究の一部は日本学術振興会学術研究助成基金助成金基盤研究（C）（課題番号 17K02839，研究代表者：八若壽美子）の助成を受けて行われた。

参考文献

- 池田庸子・八若壽美子（2017）「元留学生のライフストーリーに見る留学評価―出身国の大学教員の場合―」『茨城大学留学生センター紀要』15, 13-28.
- 池田庸子・八若壽美子（2016）「日本で働く元留学生のライフストーリーに見る留学評価」『茨城大学留学生センター紀要』14, 49-66.
- 川上郁雄（2014）「あなたはライフストーリーで何を語るのか―日本語教育におけるライフストーリー研究の意味」『リテラシー』14, 11-27.
- 三代順平（2009）「コミュニティへの参加の実感という日本語の学び―韓国人留学生のライフストーリー調査から」『早稲田日本語教育学』6, 1-14.
- 三代順平（2015）「日本語教育学としてのライフストーリーを問う」『日本語教育学としてのライフストーリー』くろしお出版, 1-22.
- 中山亜紀子（2007）「韓国人留学生のライフストーリーから見た日本人学生との社会的ネットワークの特徴：「自分らしさ」という視点から」『阪大日本語研究』19, 97-127.
- 中山亜紀子（2011）「学部留学生対象の日本語教育を考える―中国人男子学生のライフストーリーを通して―」『アカデミック・ジャパニーズ・ジャーナル』3, 78-85.
- 桜井厚（2012）『ライフストーリー論』弘文堂
- 佐藤正則（2013）「留学経験の意味と自己実現についての考察―元留学生のライフストーリーから」『早稲田大学日本語教育研究センター言語文化教育研究会』11, 3018-327.